

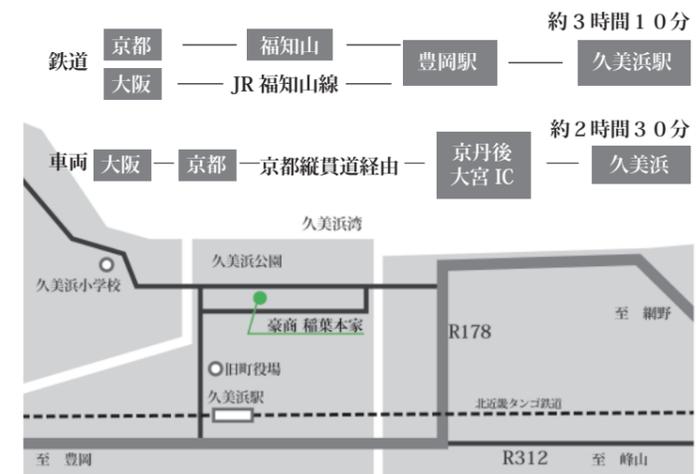


環境と観光のアートプロジェクト

丹後は東経 135° に位置し、南北に延びる日本列島の真ん中にあり、日本のヘソのような場所とってよい。

古代から環境や文化、技術の影響を大陸から色濃く受け、様々な歴史的变化を経て丹後地域の今がある。たくさんの伝説、伝承、豊かな自然、豊富な産物、連綿と続く人々の暮らしがあった丹後であるが、しかし今ここにきて、少子高齢化の影響が大きく、廃村、廃校、空家が増えるなど避けては通れない問題となっている。

稲葉本家中庭の、大地より湧き出で、天に昇華する三橋玄氏の竹のオブジェを通して、丹後の魅力を発見し、これからの丹後の環境と文化を考え、未来に向けて、具体的な提案ができたと思います。



新型コロナウイルス感染症の拡大状況により中止・延期する場合がありますのでご了承ください。

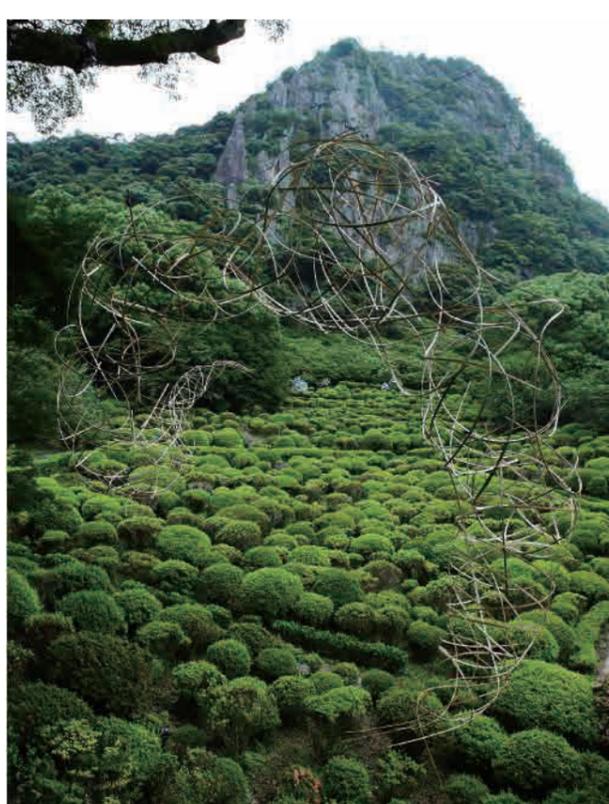


三橋玄
みっはしげん



竹アーティスト。1972年、東京生まれ。世界辺境放浪の旅を経て、作家活動に入る。野外での大型インスタレーション制作の中で竹に出会い、2005年から「いのちのかたち」をテーマに竹の巨大造形を作り続けている。地域や文化、歴史をテーマにした様々なイベントでのアートやモニュメント制作、「フジロックフェスティバル」などの野外フェスの会場やステージ、店舗や公共空間の装飾などを幅広く手掛ける。世界遺産 文化財に指定された遺跡・寺社・史跡・城址などでの制作も多い。

2017年フランスで野外展示。竹をテーマにした地域活性化のための活動にも多数関わる。自ら竹を切って作り続ける中で「竹は人を必要としている」ことを発見し、人と自然の共生のシンボルである竹の可能性を広げようと「竹の國」を2012年に設立、竹林の整備とともに竹の使い道、活用の研究、商品開発、ワークショップや講演、「竹林茶会」も行っている。奈良県桜井市在住。



2月13日(日) PM2:00~3:00 オープニングイベント



鈴木 昭男 Suzuki Akio

60年代の〈なげかけ〉と〈たどり〉のコンセプトによる自修イベントの体験の中からエコー音器 ANALAPOSを創作し、演奏活動を展開。1987年、ドクメンタ 8 カッセルに出場した。1988年には、〈一日の自然に耳を澄ます〉「日向ぼっこの空間」を、日本標準時子午線の通る京都最北の丹後の山中で遂行。1996年、ベルリンで発表した巻に耳を澄ます「点音 "o to da te"」を、世界各地で継続している。即興演奏家としても知られる。

Courtesy of Beethoven Foundation for Art and Culture Bonn / Photo by Meike Boeschmeyer



宮北 裕美 Miyakita Hiromi

イリノイ大学芸術学部ダンス科卒。舞台芸術の出演や振付を経て"立つ、歩く、座る"と言ったシンプルな動作、身の回りのモノや現象にダンスを見出し、即興パフォーマンスや視覚芸術の可能性を探る。2012年、京丹後市に拠点を移し、浜で採集した自然の石を打つダンス「NuTu(ヌトゥ)」を創始。ダンサーとして活動してきた固有の時間感覚や空間感覚を美術表現へと持ち込み、映像作品やサイト・スペシフィック・パフォーマンスを手がける。



山崎 昭典 Yamazaki Akinori

京丹後市在住。大阪芸大卒。'01-'03 鈴木昭男氏のアシスタントとして活動。'05 英国音楽誌WIREのサポートのもと、ファーストCDアルバム『RED FIELD』をリリース。クラシック・ギターの伝統性と電子音響の先鋭性が調和した本作は、同誌コンピレーションCD『WIRE tapper 13』に収録された。'14、セカンドCDアルバム『海のエチュード』等々。ソロ活動のほか、'11『異邦人』(京都舞台芸術協会プロデュース)、'15『新・内山』(京都芸術センター主催)などの演劇作品、山内桂(salmosax)との"サガイン" や安田敦美(歌)との"カタリコト"、また映像やコンテンポラリーダンス作品に音楽／演奏で参加など様々な表現分野で活動中。

2022 「ハシとハシを繋ぐ」

コロナ禍の中、2022 年世界中が混沌とし、未来の見えない時代に向かっている感がある。京丹後では新型コロナ感染者もゼロの日が続いて比較的日常に戻ってきたが、2 年もの間コロナ対策に追われ、過去の日常を忘れそうであった。人は月日が経つと慣れてきて、今ある状況が日常化するのだろう。ローカルの状況では高齢化や少子化といった社会的な課題を抱えながらむかえたコロナ感染症は地方と都市の分断でもあり、人と人の交流がいつもの日常から遠ざけられ、孤独から孤立へと人の関係性が希薄になり、またSNS や人口知能 (AI) などの新しいコミュニケーションツールにより現代人は個の世界に著しくシフトしてきていることは仕方がないことだと思うが、今を生きる我々は何故か不安を感じる日常である。

2022 年は「ハシとハシを繋ぐ」をコンセプトにアート活動を展開したい。ひとつのハシは「食と人を繋ぐ」。食の関係を紐解いていきたい。人間は他の生命を頂くという行為で命を繋いでいるが何故か人は「生」を意識せずにコンビニやスーパーで肉の部位や野菜などを求め、その物がどこで生まれどのように育つのか、あまり理解しないまま食料として消費している状況である。

現在SDGs をスローガンに食品ロスや環境問題を推進しているが今のような社会状況で解決するとは思えない。

リアルと虚構の間で私たちは「生」のためのシナリオをつくる指針が必要なかもしれない。アジア文化圏は食事の時に「箸」を使う。西洋ではフォークとナイフで食事をするマナーがあるが、いわば調理と食事は同じ延長線上にある行為なのだろう。食文化としては「箸」の方が調理と食事を分け、高度な精神性でストーリーを創りあげている。もうひとつのハシは「橋」である。橋は河川や谷に架ける物でもあるが、日本人にとっては架け橋、最も精神的なモノとして崇められている。龍宮と現世、そして浄土に繋ぐ橋、天橋立など心の橋としてあった。

今、最も必要なビジョンとして、生きるための「ハシ」とコミュニケーションツールとしての「ハシ」を今年コンセプトとして展開していき、第三の「ハシ」を目指したい。